

韓国農漁村社会（マウル）のソーシャル・キャピタル

高 崎 義 幸

(受付 2011年5月31日)

I. 序 論

今日韓国のいわゆる農漁村地域では、1960年代の高度経済成長以降、若年層は持続的に都市部へ流出し今では高齢人口比率が実質30～40%¹と超高齢社会を迎えている。また韓国では産業構造の高度化によって農漁村地域の経済は都市に比べて相対的に沈滞してきた。

もちろん政府をはじめ研究者たちは、都市と社会経済的格差を広げてきた農漁村地域を開発対象地域として認識し、地域と彼らが持っている潜在力を引き出すための努力もあったが、どちらかという地域と彼らを都市に対して受動的な存在として扱ってきたという経緯がある。

これまで行政は農漁村の社会経済開発分野において主に経済学的観点からインフラ整備を中心とした投資を実施してきた経緯があり、地域社会開発と住民の福祉の向上がそれぞれ異なる次元において個別の事業として行われてきた傾向がある。それはあくまでも国家としてのマクロ的経済発展が至上命題であって、付加価値の低い第一次産業は工業（製造業）の下位に置かれたことは事実である。そのため都市部に比べてさまざまな生活上の不便を経験している農漁村住民のニーズに対して行政の対応は期待に応えることができなかった。

また人的、物的資本が絶対的に不足している農漁村に対する一方的な経済的投資や地域開発事業などを実施することは、工業、都市優先の投資というだけでなく、農漁村住民の自律性や自尊心を傷つけることになったり、自ら地域社会の発展に寄与しようとする積極的な努力や主体性を削ぐことになった。また、場合によってはマウル住民たちが長い間大切にしてきた信頼関係、さらには自然環境までも崩壊させてしまう結果にもなった。したがって、社会経済の発展と福祉の向上という二つの目標を達成するためには農漁村住民の日常的な生活と乖離しない戦略が必要であった。

農漁村住民たちが長い時間をかけて形成してきた人間関係、文化、自然環境のなかで、生きがいを感じながら生活できるようにするためには、農漁村地域の社会経済的発展と住民の福祉の向上をつなぐもの、この二つの次元を連結させながらその相乗効果によってその両方

1 <http://www.news1.com> (2010年3月10日記事)。全国平均の高齢化率は10.9% (2010年12月；全羅南道：http://silver.jeonnam.go.kr/home/silver/welfare_policy/statistics/01/page.wscms)

を向上させることができるような接近が必要であるといえる。

このような状況下において近年ソーシャル・キャピタルという概念が経済学、経営学、政治学、行政学、教育学そして社会学などの学問分野に加えて、各国政府（日本、英国、豪州、米国など）や国際機関（世界銀行、OECD、JICA など）をはじめとする多様な分野の研究機関からも注目されている。ソーシャル・キャピタル（以下 SC²）は、これまでの経済学的な資本の概念を超えた、広く地域社会の豊かな人間関係から形成される信頼関係、互酬性の規範、ネットワークなどを社会的共通資本に見立てた概念である。

1990年代以降、アメリカの政治学者 Putnam（1993）から本格的に始まった SC に関する研究は、日本や韓国においても行政学を中心として、教育学、経済学、経営学、社会学、地域開発の分野などで比較的活発になされている。

韓国農漁村地域における社会経済的発展および福祉の向上を図る際には、外部からの投資だけでなく、地域内、そして集団内部に存在する資源を効率的に利用することを再評価する時代を迎えている。なぜなら、農漁村地域は都市部に比べて相対的に所得水準が低く、また日常生活における利便性が不足しているという側面はあるが、豊かな自然環境にくわえ、互いに親密な人間関係の中で生活を営んでいる住民たちは、競争や貨幣的価値よりも共生や共同、信頼といったものに価値を置く肯定的な面をもっているといえるからである。

このような脈絡において本研究は、韓国農漁村住民における SC の実態を明らかにすることを目的にした。

II. ソーシャル・キャピタルとはなにか

I. ソーシャル・キャピタルの概念

ソーシャル・キャピタル (SC) は「社会関係資本」または「社会的資本」と翻訳されたり、「ソーシャル・キャピタル」とカタカナで表記されたりすることが多いが、伝統的資本である物的資本 (Physical Capital) や人的資本 (Human Capital) から類推、導出される概念であるといえる。しかし、SC が物的資本や人的資本と大きく異なる点は、SC は社会関係の中に存在するため物的資本と違って不可視的であり、また人的資本と違い個人の教育や知識によって習得されることもなく、個人が所有することもできない形態の存在であるという点である。そして SC によってもたらされる利益は他の資本よりも広い範囲で社会全般におよぼす波及効果があり、公共財としての性格をもつ。〈表 1〉は、このような SC と人的資本および物的

2 Social Capital を日本語で記載する際、「社会関係資本」、「社会的資本」、「社会資本」、「ソーシャル・キャピタル」などの様々な用語が見られるが、本研究ではカタカナのソーシャル・キャピタル (SC と略式表示) を使用する。

表1 ソーシャル・キャピタルと物的・人的資本の比較

	ソーシャル・キャピタル	物的資本	人的資本
資本出处	社会関係内に内在	観察可能な物質的資本	個人の習得した技術や知識
実体性	非実体的存在	実体的存在	半実体的存在
形態	社会関係網	土地、設備、工場など	学歴、技術、資格など
特性	公共財的性格	私的所有の性格	私的所有の性格
生産性	生産的	生産的	生産的

出处：홍현미라 (2006), p. 68

資本に対する比較内容を整理したものである。

ソーシャル・キャピタルを巡っては、近年各国政府をはじめとして様々な国際機関また、行政学、政治学、経済学、経営学、社会学、公衆衛生学、教育学など多岐に渡る分野で、SCがもたらす波及効果あるいは当該分野における社会パフォーマンスの向上性などが研究されている。ただ、その定義に関しては、あまりに多くの分野で取り扱われまた研究されているためか、未だ統一されたものが存在していないのが実情である。しかし、おおよそ社会集団（マイクロレベルからマクロレベルまで）における人間関係や人と人とのつながりによって生み出される信頼、互酬性の規範、ネットワークのようなものであると一般的に理解されている。SCの概念に関して、現在もっとも幅広く引用されているのは、SC研究ブームのきっかけをつくったアメリカの政治学者 Robert. Putnam (1993) のいう「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」である (Putnam/河田潤一訳, 2001; 206 p)。

2. ソーシャル・キャピタルの分類

SCに関してはいくつかの分類方法がある。第一に、SCが及ぶ水準や範囲による分類で、個人レベルのマイクロなものから、組織や地域社会などのメゾレベル、国家などのマクロレベルを区別する分類方法がある。第二に、SCの構成要素の特徴による分類として、認知的SCと構造的SCがある。認知的SCは、互酬的な規範、信頼、信念といった価値観に係わるものであるのに対し、構造的SCは、ネットワーク、規約、社会的組織など客観的にとらえることのできるようなものを指す。第三に、SCの性質による分類方法として、結束型 (bonding) SCと橋渡し型 (bridging) SCがある。結束型SCは、地縁・血縁関係のように組織の内部の中における同質的な結びつきにもとづく社会関係で、強い信頼、互酬性の規範を生じさせる。それゆえ、内部志向的で外部のものに対して排他的な側面を持つこともある。それに対し橋渡し型SCは、異なる組織間の異質な人や組織を結びつける、いわば架け橋のよう

な緩やかなネットワークで結ばれた社会関係であるとされる。

本調査研究地域との関係でいえば、農漁村地域は人口の流動性が少なく、地縁・血縁による共同体の性格が強いため、結束型 SC の高い社会であると考えられ、それらが住民の生活態度や意識に影響を及ぼしていると考えられる。

Ⅲ. 調査研究方法

1. 調査対象および方法

調査対象者は、朝鮮半島の西南部に位置する全羅南道の農漁村地域および島嶼地域に位置する7つのマウル（基礎集落）に在住の50代～70代までの住民である。50代～70代までの住民を選定した理由は、現在農漁村地域において50代～70代住民の占める割合がもっとも多いこと、またこれらの年代が地域社会の運営において中枢的な役割を担っている層だからである。

調査対象者数は350名で、マウル毎に40名～60名を目標に設定し、性別の比率が各々50%、年齢層別の比率が各々33%程度になるよう留意した。調査は2010年8月から9月にかけて構造化されたアンケート用紙を用いて、マウルを直接訪問し、直接記入が可能な者に対しては、調査票を配布した。記入が困難な者に対しては、質問内容を読み上げた後、応答内容を記入する面接式アンケート調査の方法をとった。調査票は全部で345部回収したが、無記入項目など欠陥の多いものを除いた326部を統計処理対象とした。

2. 調査票の構成と内容

調査票は、マウル（基礎集落）のソーシャル・キャピタル、被調査者の個人属性および社会経済的地位からなっている。マウル住民のソーシャル・キャピタルを測定する尺度は、マウル住民たちの社会関係における「信頼関係」、「互酬性の規範」、「参加」の3つの認知的 SC の下位変数から成る。また各変数に対しては、非公式次元と公式次元とに区分して実施した。非公式マウル SC が自然発生的でまた親密な一次的な関係において、公式的な規定や手続きなしに発生するもの（第一次集団）であるのに対し、公式的マウル SC は意図的な目的をもって公的な規定や手続きによって形成されるもの（第二次集団）といえる。また範囲の面からいえば、非公式のマウル SC はマウル内に存在する SC であるといえ、公式マウル SC は、マウルよりも少し広い生活圏、具体的にはマウルの属する面や郡単位のいわゆる地域社会レベルの SC を指す（表2）。

被調査者の個人属性および社会経済的要因は、表3の通りである。

表2 マウル住民のソーシャル・キャピタル（マウル SC）

変数	測定項目	尺度
信頼	非公式 1. 私は、マウルの人たちはみんな正直で良い人たちだと思う。 2. 私は、マウルの人たちにお金や貴重品を預けることができる。 3. 私は、マウルの指導者（里長／老人・婦人・青年会の会長など）たちが正直で誠実な人たちだと信じる。	5件尺度
	公式 4. 私は、地域の役場の職員たちが正直で誠実な人たちであると信じる。 5. 私は、地域の農協、水協などの職員が正直で誠実な人たちであると信じる。 6. 私は、郡守や議会議員たちが正直で誠実な人たちであると信じる。	
規範	非公式 1. 私は、マウルの人たちと言い争ったり喧嘩したりすることはない。 2. 私は、マウルで助けが必要な人がいれば、助けてあげようとする。 3. 私は、マウルに関することであれば、関心を持って積極的に参加する。	5件尺度
	公式 4. 私は、地域の自然環境を壊す行為をしない。（ゴミを捨てたり、燃やしたり） 5. 私は、奨学金などの寄付行為は誰でもすべきことだと思う。 6. 私は、地域の発展の助けになるなら、多少不便であっても行政の要求や規則を守る。	
参加	非公式 1. 私は、マウルの集まりに積極的に参加する。 2. 私は、マウル住民の冠婚葬祭に積極的に参加する。 3. 私は、マウルの人と行う余暇活動（旅行、運動、教育など）に積極的に参加する。	5件尺度
	公式 4. 私は、地域で開催される懇談会や会議などに積極的に参加する。 5. 私は、地域の奉仕活動（草刈り、町内清掃、環境美化など）に積極的に参加する。 6. 私は、地域の祭り、記念行事、スポーツ大会などに積極的に参加する。	

表3 被調査者の基本属性・社会経済的地位

変数	測定項目
性別	男性 女性
年代	50代 60代 70代
宗教（信仰）	ある なし
学歴	総教育年数（ ）年
居住期間	（ ）年
同居家族数	（ ）人
主観的健康感	① とても悪い方だ ② あまりよくない方だ ③ 普通 ④ 健康な方だ ④ とても健康な方だ
職業	①農業、②漁業、③農漁業、④畜産業、⑤販売技術職、⑥労務職、⑦事務職、⑧管理職、 ⑨技術専門職、⑩専門職、⑪自営商工業、⑫無職または主婦、⑬その他
世帯総収入 （月平均）	① 5万 won 未満 ② 5万～10万 won 未満 ③ 10万～20万 won 未満 ④ 20万～30万 won 未満 ⑤ 30万～40万 won 未満 ⑥ 40万～50万 won 未満 ⑦ 50万～60万 won 未満 ⑧ 60万～70万 won 未満 ⑨ 70万～80万 won 未満 ⑩ 80万 won 以上
全般的な 経済状況	① とても困難 ② 困難な方だ ③ 困難でも余裕がある方でもない ④ 余裕がある方だ ⑤ とても余裕がある

3. 分析方法

統計ソフト SPSS 17.0 for windows 版を使用して、被調査者の基本属性・社会経済的地位、また居住地域（マウル）によって住民たちの間で蓄積されている SC に違いがあるか、T 検定および分散分析を実施した。

IV. 調査地域の概要

1. 海南郡北平面 Y 里

海南郡北平面 Y 里は、面所在地から南へ 12 km ほど離れている地域に位置し、郡の中心部からバスで約 60 分程度の距離に位置している。主な産業は農業と水産業である。主な農産物は米、大蒜、白菜、唐辛子などで水産物は海苔、魚類、貝類などである。特に海苔の養殖が盛んでマウル内に 8 つ海苔の加工工場がある。Y 里は本調査対象地域中でも S 里と同じくもっとも都市部から離れており、一般的に保守的で閉鎖的な風土がある。

人口は 229 世帯で、男性 222 名、女性 248 名の合計 470 名である。調査対象者である 50～70 代の占める割合は、50 代 86 名 (18.3%)、60 代 97 名 (20.6%)、70 代 80 名 (17.0%) である（北平面内部資料、2010 年 10 月）。以前はマウル内に小学校があったほど人口規模が大きい集落であったが、断続的な人口減少により 1999 年に廃校になっている。現在その廃校は外部の者に買い取られた後、老人療養施設としてリモデリングされている。

この他マウル内の公共施設としては、集会所および敬老堂、教会、寺などがある。住民組織としては、自治会、青年会、婦人会などがあり、マウルの代表的な伝統行事として旧暦の正月の満月に行われる村祭りがある。

2. 海南郡三山面 M 里

海南郡三山面 M 里は、郡の中心部から南へ 14 km、面所在地から南に 2 km ほど離れている地域である。海南の代表的な観光地である大興寺と頭龍山（海拔 661 m）道立公園の入口に位置する。M 里の主たる産業は、農業および農村観光である。主たる農産物はキノコ、花木、果樹などである。観光産業は、韓屋³民宿を中心としたさまざまな農村体験プログラムを通して大興寺・頭龍山を訪れる観光客を誘致している。

人口現況は 127 世帯で、男性 132 名、女性 143 名の計 275 名。調査対象者である 50～70 代の占める割合は、50 代 61 名 (22.2%)、60 代 41 名 (14.9%)、70 代 25 名 (9.1%) である（山三面内部資料、2010 年 10 月）。

3 朝鮮家屋：韓国古来の建築様式で建てた家屋。

マウル内の公共施設は、マウル会館、敬老堂、マウル情報センター、キノコ博物館、マウル体験館などがある。マウル組織は自治会、青年会、婦人会のほか情報化マウル運営委員会などがある。マウルで行われる主な行事としては、大興寺祭りなどがある。

M里は他の多くの農漁村集落と同じように若年世代の都市への流出などにより離農者が増加しながら、廃家が増えていた。このような危機を契機として廃家をリモーデリングした「韓屋村」を形成するようになった。この「韓屋村」が評判となり観光客を誘致することに成功し、2006年には海南郡から「韓屋保存マウル」として指定され、また2007年には全羅南道から「幸福マウル⁴」として指定された。

3. 海南郡北平面 N 里

海南郡北平面 N 里は面所在地で、海南郡の中心からバスで約50分の距離に位置している。N里の主たる産業は、農業と水産業である。また5日に一度市場が開かれ、市が開かれる日には多くの買い物客が訪れる。

人口構造は476世帯で男性501名、女性531名の計1031名。調査対象者である50～70代の占める割合は、50代163名（15.8%）、60代190名（18.4%）、70代115名（11.2%）である（北平面内部資料、2010年10月）。

マウルの公共施設は、面事務所、マウル会館、敬老堂などがある。N里は北干面事務所所在地であり、周辺の集落と比べ比較的規模が大きいため、保健所、医院、薬局、郵便局、小中学校、農協、水協などが集まっており、商店も多い。主たるマウル組織は、老人会、セマウル指導者協議会、消防団、防犯隊、青年会、婦人会などがある。

4. 務安郡一老邑 B 里

務安郡一老邑 B 里は、邑所在地から東に6 kmほど離れている地域である。B里は6つの基礎集落が大きな蓮池を囲む形で存在している。B里の主たる産業は、農業と農村観光である。主な農産物は米、レンコン、蓮の葉、玉葱、大蒜、黒豆などである。

人口構造は、282世帯で男性290名、女性313名の計603名。調査対象者である50～70代の占める割合は、50代93名（15.4%）、60代83名（13.8%）、70代107名（17.7%）である（一老邑内部資料、2010年7月）。

マウル内の施設としては、マウル会館、敬老堂、教会、蓮広報館、蓮料理専門店などがあ

4 幸福マウルとは社会経済的に立ち遅れている農漁村マウルを居住したくなるような地域にし、現地に定住、都市民たちが帰ってくるマウルにするための支援事業である。また持続可能な共同体の復元を通じた農漁村地域住民の生活の質の向上を目的に、全羅南道で1邑当たり1箇所を目標に全羅南道が支援をしている。支援額は1マウル当たり40～70億 won（全羅南道幸福マウル <http://www.happyvil.net/>）。

る。マウル組織には、自治会、青年会、婦人会、老人会などがある。また、毎年 8 月には、務安郡主催で開かれる蓮産業祝祭がある。

5. 務安郡清溪面 W 里

務安郡清溪面 W 里は木浦市（人口約 24 万人）と 9.8 km ほど離れており、面所在地から東南方向に 4 km ほど離れている地域である。W 里の主たる産業は農業で、米、ほうれん草、玉葱、春菊などが特産である。

人口構造は、217 世帯、男性 251 名、女性 273 名の計 534 名である。調査対象者である 50～70 代の占める割合は、50 代 72 名（13.7%）、60 代 57 名（10.9%）、70 代 69 名（13.2%）である（清溪面内部資料、2010 年 10 月）。

マウル内施設は、マウル会館、情報センター、多目的会館、野外公演場などがある。マウル組織は、むらづくり委員会、情報化マウル運営委員会、青年会、婦人会などがある。9 月には、住民主催で開催される「田舎祭り」がある。

また、W 里は 1986 年から芸術家たちがマウルに居住しながら、「芸術人村」を形成、現在 18 名の芸術家たちが居住しながら住民や観光客を対象に書道や陶芸、彫刻などを教えている。

その他、W 里で行われている情報化マウル事業、多目的会館の運営などは政府や自治体による支援によって運営されており、住民たちの手弁当で行われているわけではないという。これに関連して、マウルの指導者層と一般住民たちとの間で意見の違いや葛藤があるという。指導者層は政府および自治体からより多くの補助金を貰うための実績作りに励んでいるが、このような努力に対して冷笑の目で眺める住民も少なくないという。

6. 新安郡押海面 D 里

新安郡押海面 D 里は、押海島⁵という島に位置し、面所在地から 4 km ほど離れている地域である。主たる産業は農業と水産業である。農産物は、米、イチジク、大蒜、玉葱、唐辛子などで、水産物は広大に広がる干潟でナマコの養殖を行ったり、エビ・貝・タコ・海藻類などが豊富に採れる。

人口構造をみると、202 世帯、男性 141 名、女性 270 名の計 411 名。調査対象者である 50～70 代の占める割合は、50 代 80 名（19.4%）、60 代 98 名（23.8%）、70 代 76 名（18.5%）である（押海面内部資料、2010 年 7 月）。

マウル内施設には、敬老堂、教会などがある。主なマウル組織には、老人会、青年会、婦

5 押海島は木浦市近隣に位置する島で、住民登録上は 3,109 世帯、7,256 名の住民がおり、その多くは農業と漁業を兼業している。2008 年に島と木浦市を結ぶ橋（全長 3,563 m）が開通し、生活圏域が木浦市と近くなった。

人会などがあり、主たるマウル行事として毎年12月に行われる洞契、5月には孝道観光などが開催される。

D里のもっとも大きな特徴は、小さな集落の中に教会が二つあるのだが、住民の90%以上が登録教徒であり、教会を中心とした住民たちの交流およびネットワークが形成されているという点である。

7. 新安郡新衣面 S 里

新安郡新衣面 S 里は全羅南道新安郡の南に位置する島にあり、面所在地は上台東里である。新衣面は有人島である上台島・下台島・箕島・高沙島・平沙島と23の無人島が含まれている。木浦市からの高速船は所要時間1時間20分、一般船は約2時間である。S里の主たる産業は農業および水産業である。農産物は、米、麦、胡麻、玉葱などで、水産物は塩の生産が盛んであり、沿岸では海苔の養殖が盛んである。

人口構造は、248世帯、男性343名、女性306名の計649名である。調査対象者である50～70代の占める割合は、50代93名（14.3%）、60代87名（13.4%）、70代84名（12.9%）である（新衣面内部資料、2010年10月）。

マウル内の主な施設は面事務所、郵便局、保健支所、老人会館、教会などであり、住民組織として老人会、青年会、婦人会などがある。主な行事としては、夏にハイキング、秋にはエビ祭りが開催される。

表4 調査対象地域の現況

人（%）

地域	世帯	人口	男	女	50～70代	主たる産業	施設	住民組織
Y 里	229	470	222	248	263 (56.0)	農・水産業 大蒜、白菜、海苔、魚貝類	老人在家福祉	(共通の組織)
M 里	127	275	132	143	127 (46.2)	農業・観光 キノコ、花木、韓屋民宿	情報センター マウル体験館	情報化マウル 運営委員会
N 里	476	1031	501	531	468 (45.4)	農・水産業 白菜、魚介類	面事務所、郵便局、 農水協、医院、保健 所、小中学校など	消防団、防犯 隊
B 里	282	603	290	313	283 (46.9)	農業・観光 蓮、玉葱、黒豆	蓮広報館、蓮料理 専門店	(共通の組織)
W 里	217	524	251	273	198 (37.8)	農業・観光 法蓮草、春菊、玉葱	多目的会館、野外 公演場	むらづくり委 員会
D 里	202	411	141	270	254 (61.8)	農・水産業 無花果、ナマコ、魚介類	(共通の施設)	(共通の組織)
S 里	248	649	343	306	264 (40.7)	農・水産業 塩、海苔、魚介類	郵便局、保健支所	(共通の組織)

〈表 4〉は調査対象地域の現況をまとめたものである⁶。

V. 結果と考察

1. 調査対象者の個人属性および社会経済的地位

調査対象者の個人属性および社会経済的地位を〈表 5〉に提示した。調査対象者の居住地域では D 里が 62 名 (19.0%) で最も多い。つぎに S 里の 51 名 (15.6%), W 里の 47 名 (14.4%), Y 里の 46 名 (14.1%) の順に多く, B 里, M 里, N 里は各々 40 名 (12.3%) ずつである。男女の比率は, 男性 165 名 (50.6%), 女性 161 名 (49.4%) とほぼ同じ割合となった。年齢層もまた 50 代が 108 名 (33.1%), 60 代が 101 名 (31.0%), 70 代が 117 名 (35.9%) と同等の水準となっている。

宗教 (信仰) を持っている人は 58.6% であった。教育水準を見ると, 教育を受けたことがない人が 18.4% であった。また教育期間をみると, 小卒以上に該当する「6~8 年」が 31.3% で最も多かった。続いて「9~11 年」17.8%, 「12~13 年」16.3%, 「1~5 年」8.9%, 「16~17 年」3.4%, 「14~15 年」2.8%, の順であった。自身を含めた家族構成は, 2 人暮らしが 50.0% で最も多く, 次いで独居 (18.4%), 3 人暮らし (16.0%), 4 名以上 (15.6%) の順であった。

月平均世帯収入は, 50 万 won 未満が 42.9% で最も多かった。つづいて 100 万 won 未満 (24.5%), 100~200 万 won 未満 (17.8%), 200~300 万 won 未満 (7.1%), 300~400 万 won 未満 (4.6%), 400~500 万 won 未満 (1.8%), 500~600 万 won 未満 (1.2%) の順であった。世帯における主観的な経済状況は, 「普通 (困難でも余裕でもない)」が 54.3% で最も多かった。つづいて「困難な方だ」(30.4%), 「余裕がある方だ」(10.4%), 「とても困難だ」(4.6%), 「とても余裕がある」(0.3%) の順であった。

2. マウル住民のソーシャル・キャピタルに対する平均比較

1) 基本属性・社会経済的地位によるマウル SC の平均比較

性別, 年代, 教育水準, 家庭の経済状況, 宗教 (信仰) の有無によってマウル住民の SC に違いがあるかを検証した。「マウル SC」は, 「非公式マウル SC」と「公式マウル SC」に区別してその平均点を比較した。以下, 統計的な差が現れたものについてのみ結果を示す。

6 調査対象地域において共通的にみられる農産物 (米, 大蒜, 唐辛子など) や施設 (敬老堂, マウル会館, 亭子など) および住民組織 (青年会, 婦人会, 老人会) は表から除外した。

表5 調査対象者の個人属性および社会経済的地位

人（%）

区 分	男 性	女 性	計	
地 域	Y 里	21 (6.4)	25 (7.7)	46 (14.1)
	M 里	19 (5.8)	21 (6.4)	40 (12.3)
	N 里	23 (7.1)	17 (5.2)	40 (12.3)
	B 里	18 (5.5)	22 (6.7)	40 (12.3)
	W 里	27 (8.3)	20 (6.1)	47 (14.4)
	D 里	32 (9.8)	30 (9.2)	62 (19.0)
	S 里	25 (7.7)	26 (8.0)	51 (15.6)
	小 計	165 (50.6)	161 (49.4)	326 (100)
年 齢	50代	55 (16.9)	53 (16.3)	108 (33.1)
	60代	52 (16.0)	49 (15.0)	101 (31.0)
	70代	58 (17.8)	59 (18.1)	117 (35.9)
	小 計	165 (50.6)	161 (49.4)	326 (100)
宗教（信仰）	ある	80 (24.5)	111 (34.0)	191 (58.6)
	なし	85 (26.1)	51 (15.6)	135 (41.4)
	小 計	165 (50.6)	161 (49.4)	326 (100)
教育水準	無学	12 (3.7)	48 (14.7)	60 (18.4)
	1～5年	12 (3.7)	17 (5.2)	29 (8.9)
	6～8年	50 (15.3)	52 (16.0)	102 (31.3)
	9～11年	40 (12.3)	18 (5.5)	58 (17.8)
	12～13年	35 (10.7)	18 (5.5)	53 (16.3)
	14～15年	5 (1.5)	4 (1.2)	9 (2.8)
	16～17年	7 (2.1)	4 (1.2)	11 (3.4)
	18年以上	4 (1.2)	0 (0.0)	4 (1.2)
	小 計	165 (50.6)	161 (49.4)	326 (100)
家族構成	独居	15 (4.6)	45 (13.8)	60 (18.4)
	2人	94 (28.8)	69 (21.2)	163 (50.0)
	3人	29 (8.9)	23 (7.1)	52 (16.0)
	4人以上	27 (8.3)	24 (7.4)	51 (15.6)
	小 計	165 (50.6)	161 (49.4)	326 (100)
月平均 世帯総所得	50万 won 未満	56 (17.2)	84 (25.8)	140 (42.9)
	50～100万 won 未満	37 (11.3)	43 (13.2)	80 (24.5)
	100～200万 won 未満	41 (12.6)	17 (5.2)	58 (17.8)
	200～300万 won 未満	12 (3.7)	11 (3.4)	23 (7.1)
	300～400万 won 未満	9 (2.8)	6 (1.8)	15 (4.6)
	400万 won 以上	10 (3.1)	0 (0.0)	10 (3.1)
	小 計	165 (50.6)	161 (49.4)	326 (100)
全般的な 経済状況	とても困難だ	4 (1.2)	11 (3.4)	15 (4.6)
	困難な方だ	55 (16.9)	44 (13.5)	99 (30.4)
	普通	85 (26.1)	92 (28.2)	177 (54.3)
	余裕がある方だ	20 (6.1)	14 (4.3)	34 (10.4)
	とても余裕がある	1 (0.3)	0 (0.0)	1 (0.3)
	小 計	165 (50.6)	161 (49.4)	326 (100)

(1) 性別によるマウル SC の平均比較

「非公式マウル信頼」にだけ男女間の違いがみられ、女性の平均 ($M=3.64$) が男性の平均 ($M=3.48$) より高かった。しかし、他の変数について男女の違いは現れなかったので、全般的にマウル SC における男女の違いは無いといえる。

(2) 年代別によるマウル SC の平均比較

年代別によるマウル SC の平均比較では「非公式マウル信頼」と「非公式マウル参加」、「公式マウル信頼」のみ有意差が見られた。「非公式マウル信頼」は、70代 ($M=3.70$) が50代 ($M=3.47$) および60代 ($M=3.50$) よりも有意に高かった。「非公式マウル参加」の場合、70代 ($M=3.78$) が最も高く、50代 ($M=3.54$) が最も低かった。「公式マウル信頼」は、70代 ($M=3.46$) が50代 ($M=3.15$) および60代 ($M=3.17$) よりも有意に高かった。

70代が他の年代よりもマウル住民および地域の公務員や諸機関に対する信頼が高かったのは、他の年代よりも長くマウルに居住している故に住民に対する信頼関係の蓄積が豊富であると考えられる。また、70代が他の年代に比べ、マウル内における住民の集まりや冠婚葬祭、余暇活動などに参加しているという実態が明らかになった。

(3) 教育水準によるマウル SC の平均比較

教育水準によるマウル SC の平均比較では「マウル参加」のみ有意差がみられた。教育水準が最も高い「14年以上」の集団 ($M=3.19$) のマウル参加が最も低かった。他の教育水準集団では有意差がみられなかった。教育水準が高い集団だけ「マウル参加」が低く現れたことは、教育効果による意識の差に加えてマウル外での居住期間が長かったことなどが関係していると思われる。

(4) 家庭の経済状況によるマウル SC の平均比較

家庭の経済状況によるマウル SC の平均比較を行ったところ、全ての変数において有意差がみられなかった。すなわち、本調査では経済状況によって「マウル SC」に差がなかった。

(5) 宗教（信仰）の有無によるマウル SC の平均比較

宗教（信仰）の有無によるマウル SC の平均比較では、「非公式マウル規範」および「公式マウル規範」のみ有意差がみられた。「非公式マウル規範」は「宗教（信仰）」がある集団 ($M=3.77$) が、ない集団 ($M=3.58$) の平均より高かった。同様に「公式マウル規範」の場合も「宗教（信仰）」がある集団 ($M=3.79$) がない集団 ($M=3.64$) よりも高かった。

2) マウル別によるマウル SC の平均比較

(1) マウル別による非公式マウル SC の平均比較

調査対象者の居住地域別による「非公式マウル SC」の平均比較分析結果を〈表6〉に提示した。「非公式マウル SC」の下位変数である「非公式マウル信頼」、「非公式マウル規範」

表6 マウル別「非公式マウル SC」の平均比較

区 分	N	平均	標準偏差	事後検定	F	Sig	
マウル 信頼	Y里	46	3.49	.612	ab	3.519	.002
	M里	40	3.67	.604	ab		
	N里	40	3.40	.496	a		
	B里	40	3.37	.500	a		
	W里	47	3.67	.614	ab		
	D里	62	3.79	.742	b		
	S里	51	3.44	.544	ab		
マウル 規範	Y里	46	3.74	.553	ab	4.527	.000
	M里	40	3.97	.584	c		
	N里	40	3.50	.720	a		
	B里	40	3.47	.516	a		
	W里	47	3.60	.724	ab		
	D里	62	3.91	.683	b		
	S里	51	3.57	.582	ab		
マウル 参加	Y里	46	3.69	.594	bc	7.188	.000
	M里	40	3.98	.739	c		
	N里	40	3.48	.617	ab		
	B里	40	3.60	.556	abc		
	W里	47	3.79	.754	bc		
	D里	62	3.91	.780	c		
	S里	51	3.22	.708	a		
総マウル SC	Y里	46	3.64	.443	ab	6.765	.000
	M里	40	3.87	.545	b		
	N里	40	3.46	.448	a		
	B里	40	3.48	.366	a		
	W里	47	3.69	.582	ab		
	D里	62	3.87	.597	b		
	S里	51	3.41	.517	a		

そして「非公式マウル参加」の全てにおいて有意差がみられた。

具体的に、「非公式マウル信頼」の平均点はD里（M=3.79）が最も高く、B里（M=3.37）が最も低かった。事後検定の結果、その他の里はほぼ同じ水準にあった。つまりD里が最もマウル住民に対する信頼感が高く、逆にB里が最も低いことを意味している。

「非公式マウル規範」は、M里（M=3.97）とD里（M=3.91）が最も平均点の高い群で、N里（M=3.50）とB里（M=3.47）が最も低い群に属している。つまり、M里とD里がマウル内の規範が高く、N里とB里のマウル内規範が低いことを意味している。

「非公式マウル参加」もやはりM里（M=3.98）とD里（M=3.91）が最も平均点の高い群で、S里（M=3.22）が最も低かった。事後検定の結果、Y里（M=3.69）とW里（M=3.79）は同等の水準で、B里（M=3.60）そしてN里（M=3.48）の順に「非公式マウル参加」が

低い結果となった。つまり、マウル内の行事への参加について、M 里および D 里の住民が最も積極的な参加意識を持っているのに対し、B 里および N 里の住民はそれが低い結果となった。

これらの下位変数を合わせた総合的「非公式マウル SC」の平均は、D 里 (M=3.87) と M 里 (M=3.87) が最も高い群に属し、次に Y 里 (M=3.64) と W 里 (M=3.69) の群、そして N 里 (M=3.46)、B 里 (M=3.48)、S 里 (M=3.41) が最も低い群であった。つまり、非公式マウル SC の総体は、D 里と M 里が最も高く、N 里 (M=3.46)、B 里 (M=3.48)、S 里 (M=3.41) が最も低いことを意味している。

(2) マウル別による公式マウル SC の平均比較

調査対象者の居住地域別による「公式マウル SC」の平均比較分析結果を〈表 7〉に提示した。「公式マウル SC」の下位変数である「公式マウル信頼」、「公式マウル規範」そして「公式マウル参加」の全てにおいて有意差がみられた。

具体的に、「公式マウル信頼」の平均点は D 里 (M=3.75) が最も高く、M 里 (M=3.53) と W 里 (M=3.59) が同等の水準で、Y 里 (M=3.25)、B 里 (M=3.35) および N 里 (M=3.27) が同等の水準で、S 里 (M=3.07) が最も低かった。つまり、地域の行政の長および職員や機関の職員などに対する信頼について、D 里住民が最も高く、S 里住民が最も低いことを意味している。

「公式マウル規範」の平均は、M 里 (M=4.03) が最も高く、次に D 里 (M=3.92) であった。Y 里 (M=3.68) と W 里 (M=3.68) は同一水準の群に属し、N 里 (M=3.54)、B 里 (M=3.56)、S 里 (M=3.51) は同一水準の群に属し最も低かった。つまり、マウルよりも少し範囲の広い地域社会における規範（環境美化、寄附・奉仕行為、規則順守など）の程度が M 里が最も高く、N 里・B 里・S 里が最も低いマウルであることを意味している。

「公式マウル参加」の平均は、D 里 (M=3.87) と M 里 (M=3.85) が最も高い群に属し、次に W 里 (M=3.70)、B 里 (M=3.55)、N 里 (M=3.41)、S 里 (M=3.18) の順で、Y 里 (M=2.41) が最も低い水準であった。つまり、地域で開催される行事・会議、清掃・奉仕活動、祭り・運動会などへの参加程度が、D 里と M 里が最も高く、Y 里が最も低いことを意味している。

これらの下位変数を合計した総合的「公式マウル SC」の平均は、D 里 (M=3.85) と M 里 (M=3.80) が最も高い群に属し、次に W 里 (M=3.66) であった。そして Y 里 (M=3.52)、N 里 (M=3.41)、B 里 (M=3.49) が同一水準の群に属し、S 里 (M=3.25) が最も低かった。

つまり、地域社会における SC 程度は、D 里と M 里が最も高く、S 里が最も低いことを意味している。

表7 マウル別「公式マウル SC」の平均比較

区 分		N	平均	標準偏差	事後検定	F	Sig
マウル 信頼	Y 里	46	3.01	.608	ab	11.436	.000
	M 里	40	3.38	.726	bcd		
	N 里	40	3.14	.617	bc		
	B 里	40	3.34	.567	bcd		
	W 里	47	3.52	.648	cd		
	D 里	62	3.70	.747	d		
	S 里	51	2.69	1.01	a		
マウル 規範	Y 里	46	3.62	.485	ab	7.662	.000
	M 里	40	4.10	.566	c		
	N 里	40	3.58	.548	a		
	B 里	40	3.66	.430	ab		
	W 里	47	3.75	.588	ab		
	D 里	62	3.93	.564	bc		
	S 里	51	3.44	.584	a		
マウル 参加	Y 里	46	3.54	.697	abc	4.429	.000
	M 里	40	3.72	.971	bc		
	N 里	40	3.34	.698	ab		
	B 里	40	3.50	.560	abc		
	W 里	47	3.60	.865	abc		
	D 里	62	3.82	.756	c		
	S 里	51	3.14	.806	a		
総マウル SC	Y 里	46	3.39	.414	b	11.947	.000
	M 里	40	3.73	.590	cd		
	N 里	40	3.36	.435	ab		
	B 里	40	3.50	.382	bc		
	W 里	47	3.62	.497	bcd		
	D 里	62	3.82	.546	d		
	S 里	51	3.09	.641	a		

「非公式マウル SC」および「公式マウル SC」の平均がともに高かった M 里と D 里の特徴をまとめてみると、M 里は、住民参加型の観光産業を中心としてマウル SC を形成しているマウルだといえる。M 里は「韓屋村」を形成、マウル近辺の観光スポットに訪れる観光客を誘致するとともに、彼らに様々な農村体験プログラムを提供している。また個人経営の韓屋（民宿）だけでなく、マウルで共同管理する韓屋を運営するなどマウル単位での事業が活発で、マウルにおける規範や住民参加が高い水準で現れている。一方 D 里は、特別な観光資源や事業はないが、教会を中心とする住民交流機会の増加によって豊かな SC が形成されている。D 里の場合、人口411名の小さな集落にもかかわらず、教会が2箇所あり、さらに住民の90%以上がこれら教会の教徒であるという特徴がある。本調査結果においても、62名中56名が教徒であった。

M 里と D 里の次に総合的な「マウル SC」レベルが高かった W 里は、M 里同様に行政から経済的支援を受け、韓屋民宿の運営や特産品の販売などの事業を行うとともに、芸術家たちが「芸術家の村」を形成し、観光客や地域住民などを対象に芸術体験プログラムを実施しているマウルである。しかし、面接調査によると、行政から経済支援を引き出すことに余念のない住民指導者層と一般住民の間で、また芸術家たちと住民たちとの間で葛藤があることが明らかになった。こられが M 里と同様の事業を行っているにもかかわらず、M 里よりも SC が低くなった理由と考えられる。

マウル SC が最も低かった S 里は、本調査対象地域中、都市と陸地から最も離れているという特徴がある。その他に、S 里は他の調査地域と比較して「独居」の比率がかなり高く、またマウル SC の蓄積に関係があると思われる「居住期間」が他の調査地域と比較して短かった。すなわち、本調査において S 里は移住してきた住民の割合が他の地域よりも高かったことなどが、SC が低く現れた理由の一つであると思われる。

Ⅵ. お わ り に

本調査研究は、韓国南西部の穀倉地帯、全羅南道においてそれぞれ特徴のある 7 つのマウルを調査地域に選定し、マウル住民たちの間におけるソーシャル・キャピタルの実態およびその特徴を分析した。その結果、マウルの特徴によって住民たちの SC 蓄積程度が異なることが調査結果に現れた。このことから、例えば行政などが何らかの支援をマウルにする場合には、マウルの特徴および SC の蓄積程度、特徴などを考慮した上で支援を行うことが重要であるということが示唆された。

研究の限界点と今後の課題としては、第一に、調査対象者と地域が限定されているため結果の一般化には注意が必要である。したがって今後、調査の対象者および地域を拡大する必要がある。第二に、SC 測定のための尺度や方法において画一されたものが存在しないため、他の研究結果と比較するときには注意が必要である。したがって、より精密で標準化された尺度の開発がなされる必要がある。

参 考 文 献

- Robert. D. Putnam/訳：河田潤一（2001），『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』，NTT 出版株式会社。
- 内閣府国民生活局（2003），『ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』。
- 農林水産省農村振興局（2007），『農村のソーシャル・キャピタル—豊かな人間関係の維持・再生に向けて—』。
- 高崎義幸（2011），농어촌 지역 주민의 Social Capital 과 삶의 보람감과의 관계，목포대학교 대학원 박사학위논문。

高崎義幸・日隈健任（2011），高齢化社会と地域福祉（17）—韓国農漁村地域の Social Capital と中高年の「生きがい感」に関する予備的調査—，『広島修大論集』第51巻 第2号 pp. 161-176.

홍현미라（2006），미국 지역 사회자본（community social capital）구축사례와 한국에 주는 시사점，『사회복지정책』제 25 집 pp. 107-132.

광주 매일신문 2008 년 11 월 20 일 기사 (<http://www.kjdaily.com/>)

Newsis <http://www.newsis.com> (2010年 3月10日記事)

전남 해남 두륜산 버섯마을 HP (<http://smurf.invil.org/>)

전라남도 행복마을 HP (<http://www.happyvil.net/>)

무안백련 흑콩마을 (<http://baekyeon.go2vil.org/>)

Summary

Social Capital of Rural and Fishery Society in Korea

Yoshiyuki Takasaki

본 연구는 한국농어촌주민들간에 축적되어 있는 Social Capital 의 실태를 명확히 할 것이다.

조사대상자는 전라남도의 농어촌 지역 및 도서지역에 위치하는 7 개 마을에 거주하고 있는 50 대부터 70 대까지의 주민이다. 조사는 2010 년 8 월부터 9 월에 걸쳐 구조화된 설문지를 사용하여 면접식 설문조사를 실시하였다. 분석대상 수는 326 부였다.

분석 결과 개인의 인구사회학적 특성보다도 거주 지역 특징에 따라 마을 주민의 Social Capital 에 차이가 있는 것으로 나타났다. 따라서 정부나 전문가 혹은 연구자들이 농어촌지역에 무슨 지원이나 개입을 할 때에는 그 마을 특징 및 Social Capital 의 축적 정도, 특징 등을 고려하고 나서 지원하는 것이 바람직하다.